

キューバ視察の報告

— 2011 年 3 月 14 日～22 日 —

Report on a Tour of Inspection to CUBA:

2011.3.14-22

井上 芳保

(概要) 2011 年 3 月に医療の視察を主な目的として科研費を使ってキューバに出かけた。「キューバ連帯の会」の 2 名および通訳の方 1 名と一緒にの旅だった。過去にキューバを訪れたことのある同会のメンバーとは違って、私にとっては初めての訪問であり、見るもの、聞くもの全てが新鮮だった。キューバ国内には、3/14-22 の期間、6 泊 7 日滞在した。

研究協力者で放射線科医師の名取春彦さんは、同時期にキューバに滞在したが、一度だけハバナ市内で落ち合う機会があったものの、基本的に別行動をとった。名取さんは現地を歩き回って独自のルートで現地の情報を得た。その成果について日本と比較して気づいたことも含めて書いていただいた。本稿の後に載せた論稿「日本がキューバ医療から学ぶべきこと」がそれである。終盤では日本社会のムラ社会的体質が批判されている。

本稿では以下で、I. にて精神科医療や障害児教育施設にかかわる見聞の成果について書く。また日系移民の子孫が多く住むと聞き、1 泊 2 日の行程で渡ってみた離島イスラ・デ・ラ・フベントゥ（青年の島）であるのミッシェル・フーコーの『監獄の誕生』に登場するパノプティコンそのものの巨大な建物群の廃墟に遭遇するという当初は全く予想していなかった体験があった。しかもそこには太平洋戦争時に日本人の成人男子 350 人ほどが強制収容されていたと聞いて驚いた。II. にてそのことを書く。III. では日系移民の方々に接して気づいたことを、IV. ではその他のことを書く。

はじめに

キューバの医療が優れていることはすでによく知られている。例えば、マイケル・ムーアのドキュメンタリー映画『シッコ』の終わり近くでキューバの医療機関が登場するシーンがある。ムーアは 9・11 で負傷した消防士

たちをキューバに連れて行って治療を受けさせる。高額の治療保険に入っていないと満足な治療が受けられないアメリカの医療の貧困との対比でキューバの医療の優れた点がきわだつシーンである。

キューバには多くの国から視察団が訪れている。日本からも医師たちが訪れていてその記録が書籍として刊行されている。だが名取

医師は果してその記述が正確にキューバ医療の実態を伝えるものかどうかといふかしんでいた。彼は一年前にもキューバを訪れており、そのときの人脈を使って今回は独自に歩き回ったようで多くの知見を得ている。本稿とあわせてお読みいただきたい。

I. キューバの精神医療を視察して

今回、私たちは特に日本においても気になっている精神医療の現場を中心にらせていただいた。日本にあるキューバ大使館を通して早くから申し入れをしていたので、先方でもさまざまな配慮をしてくれたようである。ハバナ近郊の精神病の人たちの通う地域のデイケア施設では、キューバの精神医療において代表的な一人だとガイドさんが説明してくれた、女性医師のパオラさんのお話をきくこともできた。



図1 中央がパオラ医師

精神病院を廃止したイタリアのやり方についてどう思うかと質問したのだが、それに対しては否定的であったことが印象に残っている。「それは患者のためによいことではない」と彼女は語り、キューバでは個々の患者に十分に目が行き届くような治療を心がけていると強調した。それからは看護スタッフの充実ぶりなどえんえんとキューバの病院の優れている点についての説明に入った。確かに建物の中は清潔な感じの近代的な施設であった。

「精神病院をなくする」というのが実際にはどうということなのか、イタリアでバザーリアがそれを行ったのはどうしてかについてこちらからもっと説明し、認識の基盤をはっきりさせておかないとこの質問にかかわる十分な議論をすることは困難である。そこまでできないうちに予定の時間になってしまった。

通訳を介してのコミュニケーションということもあるが、何かはぐらかされた感じであった。こちらが聞きたいことと向こうの主張したいこととのずれを向こうはよくわかっていてその上でこちらのさらなる質問は回避すべく、違った方向の話を長々と展開している印象があった。

精神医療とは医療的な要素と治安的な要素とが複雑に絡んだ領域である。外科など他の診療科とはその意味で趣がやや異なる。「狂気」の範疇には既存の社会秩序を逸脱したさまざまな人たちが組み込まれる。

社会学者という触れ込みではるばる日本からやってきた私がそのような問題に関心を持っていて踏み込んでこないかと気にしていたような感じがする。こちらからのそれ以上の質問を遮るかのようにパオラ女医はひたすら話し続けた。その事実も含めて興味深い面会だった。



図2 統合失調症の患者さんと話す

ただ上記の写真でわかるようにアメリカの国旗をプリントした統合失調症の患者がこの

施設にはいた。このような格好で施設にしていることができるというのは、考えようによっては自由であるということである。北朝鮮など他の社会主義国ではちょっと考えられないことだと言える。

また障害や精神障害を持った子供たちの教育の現場、それらを持った大人の作業している現場についても見せていただいた。全体的な印象としては、弱い立場の人に十分に配慮して社会設計しているということがよくわかってたいへんよかった。

気になったこともある。例えば、どの施設でも歓迎の歌を歌ってくれたが、様子を見て「視察慣れ」しているように思われた。世界中からさまざまな視察団が訪れているのであろう。穿った言い方になるが、視察の人たちが帰国してから自分たちのことをどう評価するのか、とても気にしていてよい印象を与えようと必死なのがある。

だが、仮にそうだととしても、ある意味では仕方ないし、それはそれで結構なことかもしれない。アメリカとの厳しい対峙状況が続く中でキューバは世界中に味方を増やしていかなければならないからだ。

II. 青年の島の収容施設

1. プレシディオ・モデーロ刑務所の遺跡

3月18日、国内便のプロペラ機でハバナから「青年の島（スペイン語でIsla de la Juventud）」に降り立った。ハバナの南南西約100kmの距離にある島で、25分ほどの飛行時間で到達する。離島と言ってもキューバではキューバ本島に次ぐ大きな島である。面積は約3千平方キロメートルで、西インド諸島では6番目に大きい[図3参照]。島の人口は、現在8万数千人と聞いている。

キューバ共和国は、14の州と、特別行政地域（特別自治区）の「青年の島」で構成されている。この島の名称は1978年に第11回「若人と学生の祭典」が開催されてからのもので、

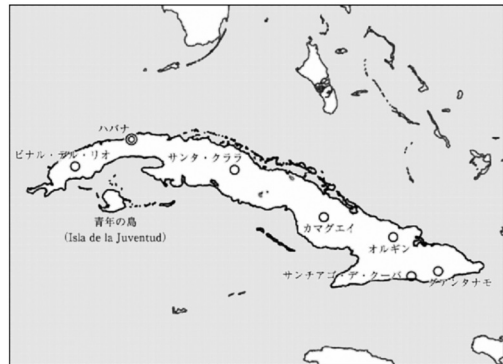


図3 ハバナと青年の島の位置

それ以前は、スペイン語の pino（松）に因んでピノス島（松島）と呼ばれていた。島の随所が松林に覆われ、林業の資源となっている。岩がむきだしの北部の山々は大理石の採石場であり、石材業が盛んであると聞いた。それにハバナに比べると農業や漁業が基幹的にずっと盛んである。内水面漁業の船が停泊する河口の漁港もあった。この島は歴史的には主に流刑地として使われてきたようだ。スペインからの独立運動の折には今では国民的英雄となっているホセ・マルティら運動を中心的に担った人たちが、そして革命前にはカストロをはじめ政治犯たちが収監されていたことでも知られている。革命前、この島のほとんどはアメリカ人有産者の私有財産だったとも聞いた。

さて、「青年の島」の空港につくと ICAP（海外からの視察者に対応するキューバ側の機関）の車が待っていてそれで我々は移動した。馬車もかなり多い。舗装されていない道を車はとばした。小石がぶつかってくる。フロントガラスに蜘蛛の巣のようにひびが入っていたが、運転手は全く意に介さぬ様子である。20分ほど走ってまず案内されたのは、かつての刑務所の跡地だった。巨大な5つの円柱形の建物と、2つの長方形の建物からなるその施設は、町の人たちの住む集落からは離れた、一帯が原野のような土地にあった。

これがプレシディオ・モデーロ刑務所（EL

PLESIDIO MODELO)である。1953年7月26日、オンタリオ州のモンカダ兵舎攻撃の後、フルヘンシオ・バティスタ政権により、フィデル・カストロに政治犯が囚われていたという長方形の建物は博物館になっていた。

驚いたのは、その円柱形の建物がフォーコー『監獄の誕生』に登場する、日本の社会学者の間では非常に有名なあのパノプティコン（一望監視装置）そのものであったことだ。すなわち、中央に監視塔があり、周囲に放射状の独房が並ぶという『監獄の誕生』冒頭の図版どおりの円柱構造の建物の実物が我々の目の前に突如現れたのである〔図4、5参照〕。

見られずに見るといいう一方的な視線、そして独房の囚人に見てみたら「いつ見られているかわからないが、見られている可能性だけは確実に存在する」状況。フォーコーによると、パノプティコンは功利主義で有名なジェレ

ミー・ベンサムが考案した。すなわち、最小の管理コストで最大限の監視を可能にする「近代の眼差し」を象徴する構築物なのである。

この建物は、イスラ・デ・ピノス国立男子収監所として1931年に竣工している。フォーコーの本に載っているのは、アメリカ合衆国イリノイ州のジュリエット刑務所の写真だが、それをそっくりモデルとしている。

すでに築80年が経過している。野ざらし状態で天井はすでにあちらこちに穴があいている。ハリケーンの度になんかなり崩落するという。我々がいたときも風が吹くと天井の破片が落ちてくる状態であった〔図6参照〕。

地面の部分は野球場が一つ入るくらい広い。中央の監視塔に入る入り口は地下にある。5階建てになっていて各階には93の独房がある。個々の独房は二畳ほどの広さで洗面台とトイレがついていた〔図7参照〕。

歩き回ってみたが、多くの個室の壁には落書きがあった。卑猥な絵も描かれていた。フォーコーもどこかで述べていたように、追い詰められた個人にとって性にかかわる事象は私秘的領域が砦となるわけだ。独房内の崩れた壁からさび付いた配管がむき出しになっている。窓からは隣の巨大な円柱が見える。

通路は人が一人やっと通れるほどの狭さである。高い階ほど罪の重い人が入れられていたという。一階までの登り降りを重ねたせい



図4 パノプティコン現れる



図5 パノプティコンの屋上から見た
パノプティコン群



図6 ハリケーンで屋根が崩落した様子



図7 個々の独房の中の様子

だろうか、階段は中央部が磨り減っていた。こわごとと登った屋上から外をみる。手すりなどないから下をのぞくと落ちそうな気がして足が竦む。コンクリートがかなり劣化していてひびわれがあちこちに目につき、早々に下に降りた。

子供が入り込んだら危険であり、日本なら「立ち入り禁止」にするような状態である。そのことを現地の人に聞いたら「このあたりに子どもはいないから大丈夫」と言っていた。来る途中のすぐの場所に小学校があったのだが、我々にはよくわからない感覚である。

2. パノプティコンに託したベンサムの夢、 それについてのフォーコーの分析

同行したある方はこの刑務所群を目にして「まるで放棄された宇宙人の基地のような異様な雰囲気」と表現した。円柱に中央部が少し盛り上がった屋根の下には、光がまばらに差し込んでいる。特に2008年のハリケーン・グスタフは、天井部分を激しく破壊したという。だって広い空間の中央に監視塔が鈍く光っている。監視塔の根本から見上げると青空がのぞいた [図8参照]。

監視塔の入り口が見あたらない。四人から



図8 監視塔の根元から見上げる

見られることなく地下道から出入りするようになっている。中には入れなかったが、高倍率の望遠鏡が備えられていたらしい。個々の独房は狭い。ここに2人が閉じ込められた場合もあったそうだ。一つのパノプティコンに最大1000人近くが収容されていたことになる。それが5つで5000人である。

独房の中に実際に立ってみると、やはり監視塔がいやでも視野に入ってくる。長く入っていると閉じ込められているという無力感に襲われそうだ。「たえず見られている」という見えざるものの意識化こそがまさしくポイントなのである。パノプティコン Panopticon とは、「すべて・あらゆる・任意のもの」を見えるという指揮・命令・管理のシステムに他ならない。そして実際、監視塔には監視のための望遠鏡も据えられていた [図9参照]。

18世紀にベンサムは、当時の監獄のおぞま



図9 監視塔にあったという望遠鏡

しい劣悪さを改善したい、犯罪者の自力更生に尽力し、教育・改造して社会的に復帰していく功利的システムを構築したいという善意からこれを考案したとされている[図10参照]。社会学者の間でよく知られているように、パノプティコンのモデルは、刑務所のみならず、学校、病院、工場などにもあてはまるとされている。

ただベンサムの夢は実は地元のイギリスやヨーロッパでは実現されなかったという。これがどうしてなのかはよくわからない。かなり広い敷地が必要ということはあるのだろうか。パノプティコン・システムの刑務所の建設は後になってアメリカという地で初めて実現されたのだという。

ベンサムその人は「善意」でこれを設計したのかもしれない。だが、現実に出て上がったものは近代社会の典型のようなシステムであった。監視塔を中心とする同心円状の各独房の中の収容者は監視されるという構造を免れない。今、監視されているのか否かは不明という事実は不気味だ。

いつも監視されていても構わないような身構えができる。そしていつしか隷属的な主体として形成されていく。囚人は分断されている。周囲との関係が切断された、収容者たち

にはただ監視されているという見えざる眼差しだけが日常生活の中ですりこまれていく。そして中央の監視塔に向かって跪くような態度になっていく[図11参照]。

フーコーが鮮やかに分析したように、これこそは「近代の眼差し」を象徴する監獄建築美学の究極的な完成品なのである。

某高名なフーコー研究者は、イリノイ州のジュリエット刑務所以降、パノプティコンは作られていないとどこかで書いていたが、そんなことは全然ないと今回よくわかった。キューバの離島にあるのなら他の近隣中南米諸国にもかつてはあったのかもしれない。そしてアメリカ統治時代に日本人が強制収容させられていたのかもしれない。そのへんについて正確な情報は得ていないが、想像はどんどん膨らむ。

だが、おそらくパノプティコンの遺跡はもはやキューバの青年の島にしかないのではないのか。世界遺産にする価値があると思った。多くの人がここを訪れ、実体験してみるべきだ。政府はこの建物の観光資源としての活用をもっと考えていいのではないか。

いつ見られているかわからないが、見られ

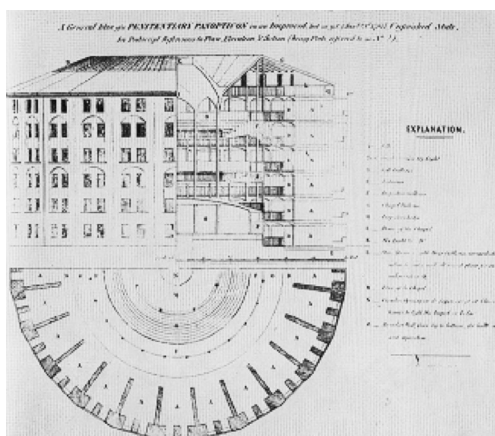


図10 パノプティコンの設計図
(フーコー『監獄の誕生』から)

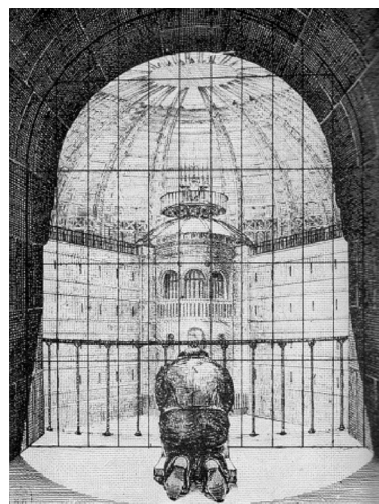


図11 独房の中の跪く囚人
(フーコー『監獄の誕生』から)

ているという可能性だけは確実に存在するという状況に身を置いたなら、どんな気持ちになるだろうか。学校教育という場、病院という場、あるいは労働という場にパノプティコンは多々ある。我々は日々いやというほど監視のまなざしのいやらしさを体験しているはずである。

刑務所型のパノプティコンという物理的構築物こそ今や直接的には見あたらないものの、現代社会でも監視カメラなどに形を変えて社会全体を管理・統制するシステムは存続している。今日の監視社会はむしろベンサム時代よりも遥かに強力になっているのだとも言える。

3. 第二次世界大戦時の日系人の強制収容

イスラ・デ・ピノス国立男子収監所は、運用開始後しばらくは罪人を収容する刑務所として機能していた。だが、このパノプティコンには、実は 350 人もの日本人が、第二次世界大戦時に強制収容されていた歴史があるということを知った。

よく知られているように第二次世界大戦は 1939 年のナチス・ドイツのポーランド侵攻をもって始まる。そして 1941 年 12 月 7 日、日本軍がパールハーバーでアメリカ艦隊を攻撃する。アメリカは日本に対して宣戦布告をした。当時アメリカに依存・服従状態だったキューバもこれに同調する。すなわち、ファシズム枢軸を形成するドイツ、イタリア、日本に対して 1941 年 12 月 11 日に宣戦布告をした。この時にキューバ共和国大統領は、現地の日本人をイタリア人、ドイツ人と共に拘束する命令を発したわけである。

日本人の財産は、敵性財産監督官によって保護・観察下に置かれた。日本人は「敵性外国人」として扱われることになり、キューバの各地に住んでいた日本人がこの島に集められた。18 歳以上の成人男性の身柄は強制収容所に収容されることになった。アメリカとそ

の同盟国に対して戦争をしていた他国人も同様である。最終的な収容者は、記録によると、日本人 350 人、ドイツ人 114 人、イタリア人 13 人などである。日本生まれの日本人の出身地は、沖縄 57 人、熊本 56 人、広島 42 人、新潟 38 人、福岡 29 人などとなっている。容易に想像できるように、監獄の中では食料が乏しく、不衛生であったため病気が発生した。収監されたうち 9 人が死亡している。

博物館の展示物を現地の女性が丁寧に説明してくれた。一家の中心で働き盛りの成人男性ばかりが収容されたので残された家族はたいへんだったようだ。家族との面会は毎月第三木曜日の正午から 15 分だけと決められていた。そのやり方は大きな制限が課せられたものであった。3、4 名の収監者とその面会者との間に背の高い衝立が立てられ、その真中に警官が 1 名配置される形でなされる。会話は距離を隔てたもので、1 メートル以上の間隔があり、スペイン語で話さねばならなかった。手を触れることも出来なかった。そして面会が許されていたのは、親兄弟と妻子だけだった。

我々を案内・説明してくれたキューバ人は、戦時中の日本人強制収容について、間違っていたと謝罪した。アメリカの植民地状態にあったにもかかわらずの真摯な姿勢である。はたして日本人は侵略したアジアの国民に対して反省的な認識・態度をとりえてきたかどうかと考えさせられる。

III. 移民の人たちの望郷の思い

1. 待っていた歓迎会

この「青年の島」には日本からの移民が戦前から、より正確には 1899 年から、多々入植していて、今でもその子孫たちが生活している。事前にそのことは「キューバ連帯の会」から聞いていた。それで敢えて訪れてみたのだが、実際に収容施設の跡に立ち寄ってみることができたし、移民の子孫の方々に会うこ

とができて本当によかったと思う。

現地の人たちはたいへんな歓迎をしてくれた。我々はパノプティコンを見た後、ICAPのオフィスのある建物に向かったのだが、そこには現地の日系人たち 30 人ほどが待ち構えていて拍手で迎えてくれた。講演会のような会場が設けられていて、我々は前に立って何か話す状況になっていた [図 12, 13 参照]。現地のローカル紙の新聞記者もいてインタビューを受けた。我々の写真入りの記事が翌日載ったらしい。これらは全く予期していないことだった。

私は、パノプティコンについては大学の講義でよく話すが、実物を見たのは初めてでたいへん刺激を受けたこと、この建物が非人間的なつくりになっていると改めて思ったこと、戦争の時にそこに入っていた人たちとその家族の苦しみについて想像すると胸が痛む



図 12 歓迎会の場に集まってくれた現地の人たち



図 13 歓迎会の会場

こと、などを話した。

また今回の日本で起きた大震災についてどう考えているかと聞かれたので、被災地の人たちの直面する苦難の解消に政府は全力を尽すべきだ。不謹慎かもしれないが、人々の消費欲望を際限なく膨らませ、電気の需要もどんどん大きくしてしまった日本社会のあり方を反省する好機かもしれないという趣旨のことも述べた。

何を調べているのかと聞かれたので「キューバの医療が優れていると聞き、それを見せてもらいに来た」と答えた。そして日本の今の精神医療では製薬会社の都合で「患者」がつくられていて必要以上に抗うつ剤を投与されてかえっておかしくなってしまう人が続出していると説明したら、あきれたような、悲しそうな顔を多くの人がした。自分たちの大切に思っている祖国がそんなひどい状態になっているとは意外だったのだろう。本当なのだから仕方がないが、この話題はこの場には不適切で、言わねばよかったかなとも思った。

2. 日系移民の苦難の歴史

日系移民の子孫の方々はすでに四世、五世の世代を迎えていた。そのほとんどは日本語を全く話せない。しかし「日本」に対する関心はきわめて高い。自分たちのルーツがそこであることを親や祖父母から繰り返し語り伝えられているのだろう。

図 13 の背景にある日本の県名を書いた垂れ幕のうち「鹿児島」に注意されたい。「鹿」という文字と「児」という文字とが横につながって一つの文字であるかのように書かれている。日本語の文字として認識されて書かれているものではないことがわかる。

後で案内されたある方の家には、富士山や芸者さんの写真、和服姿の人形、扇子、浅草あたりで売っていそうな能面等々、いかにも「日本的なもの」ばかりがずらりと並んだガラスケースがあった。行ったことがないし、な

かなか行けそうもないだけに望郷の思いは募るのだろう。記号化した「日本」を象徴するコレクションの山をみていてその気持ちは痛いほど伝わってきた。



図 14 孫を抱いて発言する女性、夫は日本人、あとで自宅に案内してくれた

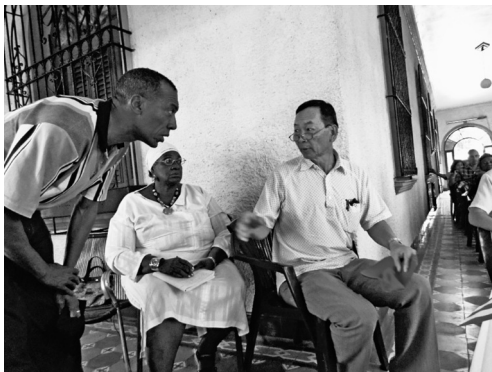


図 15 左から運転手さん、現地の新聞記者の女性、地域のリーダーのミヤザワさん

比較的最近日本からやってきて住みついてという 30 歳代の大阪出身という女性とは直接日本語で話せた。彼女はしばらくハバナに留学していたが、そこで知り合った日系男性と結婚してこの島にやってきた。彼は島で漁師をしている。奥地にはおいしい淡水魚がたくさんとれる河があるのだという。彼女は「もう日本には帰りたくない」と述べていた。ここでの豊かな人間関係に支えられたのんびりした暮らしに慣れた以上、日本人のせかせかとした暮らしにはもう戻れないという

のがその理由だった。「もう一泊していくなら味噌漬けにしたワニ肉料理をごちそうするの」にも言ってくれた。一泊二日しかこの島にいられなかったのは何とも残念であった。

現地の人たちの絆は強い。それは貧しく苦しい中を家族や仲間を大事にしながら生き延びてきた中で築かれたものだ。ご好意で日本からキューバにやってきた一世の人たちの手記をまとめた『SHAMISEN (三味線)』という貴重な冊子のスペイン語版とその部分日本語訳をいただいた。

そこには、一世代目の方々の血の滲むような努力の跡が記されている。読んでいて胸がつまるような切実な思いが綴られている。例えば、ベニータ・イハ（エイコ）さんは、沖縄からやってきた自分の母親から聞いた話について次のように書いている。

私の母が石川村を発つ前、そこに残る事になった男の子は彼女のスカートにしがみつき、幼いながらも別れを感じ取ったのか、母が出発するのを拒んだそうです。

1927 年、彼女はキューバにいる私の父と合流するために渡航を決意しました。父は 1924 年 9 月に一足早くキューバに移民しておりました。当時の風潮により、妻は夫の後を追わなければならなかったそうです。例えわが子を故郷に残すことになろうとも、私たちの家族だけではなく、他の多くの家族もそれぞれに辛い事情を抱え込んでいたことでしょう。

私の母は生涯、スカートの裾にしがみついた男の子を決して忘れることはありませんでした。しかし、そうした思いも虚しく、沖縄のお婆さんに預けた 5 人の子供たちに二度と再会することはできませんでした。

沖縄に残された子供たちの名は、ヨシコ、フミ、フクイチ、シンイチ、そしてショウイチ。それからわたしたち 4 人がキューバで生まれたのです。もちろん沖縄について

の思い出は私たちには皆無で、両親が話して聞かせてくれたものだけでした。受け継がれてきた沖縄の習慣や先祖が懐かしむ故郷への郷愁は、私たちの好奇心を絶えず刺激しました。

『SHAMISEN (三味線)』2 ページ)

「いやだ」「行かないで」と泣き叫ぶわが子を親類に委ねて故郷に置いてきた母親の気持ちは、察して余りある。貧困ゆえのやむをえぬ選択であった。そして結局、生涯、再会は果たせなかった。残してきた子供たちとどんなに会いたかったことだろうか。読んでいて切ない気持になった。

1920 年代の日本からは新しい生活を求めて多くの移民が海外に旅立っていった。北海道に「内地」からやってきた人たちも同様であったろう。異郷では苦しい生活が待っていた。貧困や病気で身内が命を落とした家族も少なくない。その生活史を発掘する研究をしていくと、『SHAMISEN (三味線)』のような思いの「語り」に我々は多々直面するのであろう。北海道民としてはそのようなことに思いが及んだ。

それにしても日本の社会学者によってハワイ、そしてブラジルをはじめとする中南米諸国の日本人移民の研究は多々なされているが、キューバのそのことはまず聞かない。やはり社会主義国という壁のせいだろうか。研究の空白地帯となっている社会学という学問のありようも国際的な政治状況に実は左右されているのではと考えさせられる。

IV. 他の諸々のことと全体的な印象

日本からキューバへの直行便はない。フロリダ半島の先端からキューバは目と鼻の先なのにアメリカからキューバには直接は入れない。日本からキューバに行くならメキシコ経由かカナダ経由かになる。我々はエアカナダの便を使い、トロントで一泊してからハバナ

へ向かった。

アメリカの執拗な経済制裁がキューバを苦しめていることはよく知られている。ハバナ国際空港ではパスポートにスタンプを押さない。代わりにツーリストカードを渡す。キューバを訪れた人間が「反米的」とみなされて不利な扱いを受けるのに配慮してのことだ。国交断絶状態はこんなところにも現れている。

トロントではテレビでも新聞でも日本の震災のことを大きく報じていた。原発事故は特に大きな関心事となっていた。FUKUSHIMA の語が頻出し、放射能漏れについて記者会見する枝野官房長官が映っていた。ニュース番組の地図には「福島第一原発」から同心円が描かれ、半径 300 キロ以内には首都圏もすっぽり入る。日本のメディアの出す地図にはこの半径 300 キロの円がなぜか入っていなかった。アメリカとカナダでは半径 80 キロ以内にいる在日の自国人に退避を命じたという。向こうからみたら日本列島全体が危険なエリアになっている。日本に向かう観光客もばったり途絶えた。

キューバ国内には一週間の滞在だったが、雨は一度も降らず晴天続きだった。空はぬけるように青い。カリブ海から吹き寄せる風は肌に心地よい。ハバナは陽気でにぎやかな街だった。とにかくみんな明るい。

街で話しかけてきた中年の男性は「子供に野球を教えている」という以外に何をして生



図 16 ハバナ市内で会った陽気な男性

活しているのか結局よくわからなかったが、おしゃべりで楽しそうな人だった。日本のマツザカ投手の名を彼はよく知っていた。2006年のワールド・ベースボール・クラシックでキューバ打線を牛耳った好投手として。

空港の両替所周辺にも何をしているのかわからないような人たちが結構いたが、おしゃべりと笑いが絶えない。ぶらぶらして一日を過ごす人もかなり多いらしい。それでいて日本でニートに向けられるような冷たい視線は一切ない。せかせかとしていない。

1960年代くらいには走っていたが、遠の昔に姿を消したアメリカのクラシックカーが未だに現役で稼働している。モノがない中で古いものを修理して大事に使っていることがよくわかる。普通の人が車を修理する技術を持っているらしい。ボンネットを開けて修理している光景は何度も見かけた。

三輪の自動車で乗客が二人乗りのタクシーもあった。車体が軽いから燃費はいいだろう。ホテルに帰る際に一人で乗ってみたが、乗り心地も悪くない。15分くらいは走って4兌換ペソ（1兌換ペソは約90円）。高くはない。乗る機会はなかったが、日本では見ない自転車のタクシーも多かった。人間の足の力だけで動き燃料の不要な自転車という乗り物は偉大な発明品であると思つづくと思う。

芸術家が集まって生活をしているハバナ郊外のエリアにも我々は案内された。壁には自由なアートが多々描かれていた。斬新なデザインの彫刻も街角に普通に並べられていた。鍋や灰皿を打ち鳴らす前衛的音楽家もいてその場で演奏してくれた。彼が演奏を始めると、地域の人たちが集まってきた。

その地域にあった病院（ポリクリニコ）は少しも病院らしくない。壁は斬新なアートで



図 17, 18 三輪の2人乗りタクシー



図 19 芸術家たちの村にあった病院（ポリクリニコ）



図 20 芸術家たちの村で出会った小学生

塗られているし、病院のような外見では全くない。医師と看護婦が常駐していて、ちょっとした風邪や怪我ならここで処置される。

いかにも病院らしい環境こそが適切な治療を阻んでいると気づいて精神科病院そのものをなくしてしまったイタリアのフランコ・バザーリアの実践を思い出す。他の診療科にしても「医療」は患者にとって生活の一部にすぎないはずで、「医療」が生活を覆い尽くすようになっては本末転倒というものだろう。例えば、物理的な拘束衣はなくなっても薬が見えない拘束衣となっている場合も「医療」が生活を覆い尽くしている状態と言える。

肝心の医療関係の視察については、先に記した地域の精神医療センターの他、特別支援教育関係の施設、エイズ防止の取り組みをしている機関などを見せてもらったし、精神医

療で働く医師と看護師の話をきくこともできた。精神病の人たちも子供たちも歌で歓迎してくれた。文部科学省の科学研究費の助成による研究の一環というふれこみでの、大使館を通しての申し入れであったから先方もかなり身構えていたと思われる。

ICAP が計画のスケジュールでは随分気を遣ってくれたような気配が濃厚だった。医学部で相手をしてくれたアカデミーの最高権威のような教授が終わってからホッとしていたのが印象的だった。日本に帰って私が何を報告するかを見越してぜひ見て欲しい施設を見せてくれたのだろう。

先にも記したように子どもたちの様子を見ていて視察慣れしている気はした。先方の見せたいものを見せられたということだろう。だが、そのことを差し引いても、全体的に優れた医療や教育を実践しているという印象を受けた。



図 21 革命広場、壁にはゲバラの模様



図 22 革命記念塔の屋上から革命広場を見下ろす。北側にカリブ海が見える。



図 23 ハバナの旧市街

最後に本稿で取り上げてきたことをまとめると、パノプティコンの整然として個々人を切り離していくまさしく近代を象徴する冷たい空間とハバナ市内でも離島でも出会った現地の人々の陽気で暖かくて人なつっこい、人間味あふれる感触とが対比的だった。

近代主義の精神科の医療は前者のような施設を志向してきたのかもしれないが、後者のような関係性の中でこそ人は癒されるのであ

ろう。一年前、私がキューバに出かける直前に書きあげた論稿「ブリコラージュとしての精神医療」（『社会情報』20巻2号）で論じたのは結局、そのようなことであった。

本稿および、次の名取論文は、科学研究費（基盤研究C）の助成による「健康不安意識と医療資源の不平等配分の是正に関する社会学

的研究」（代表 井上芳保，2009年～2011年度）の研究成果の一部である。また、この研究の成果として、井上芳保編『健康不安と過剰医療の時代——医療化社会の正体を問う』（長崎出版）も3月15日に刊行される。そこに収められた名取春彦「なぜ、この国の医者は平気で患者を見捨てるのか」論文も関連するものとしてお読みいただきたい。